



国境なき医師団報告書

2002年5月

アンゴラ

～27年の内戦にあえぐ住民たち～

* 文中の写真と人物名には特定の関連性はありません。

目次

1. アンゴラ略史
2. 暴力と餓えにさらされた人々
3. MSFを通して見えるアンゴラ「空白地帯」の実態
4. 避難民の証言
5. ニュースリリース一覧

1. アンゴラ略史

1975年の独立をきっかけに、それまでポルトガル植民地だったアンゴラでは、アンゴラ解放人民運動(MPLA)が権力を掌握、アンゴラ全面独立民族同盟(UNITA)との間に内戦が勃発しました。社会主義政権であるMPLAをキューバ・旧ソ連が、UNITA連合軍を南アフリカと米国が支援するという、当時の冷戦構造を多分に反映した対立でした。



1988年には東西両陣営がアンゴラから撤退しましたが、その時点で既に35万の人々が内戦で命を落としていました。

1991年になると、恩赦、国民統合軍の創設、そして複数政党制による大統領選挙及び議会選挙の実施を盛り込んだ和平協定がサビンビ UNITA 議長とドス・サントス大統領の間で結ばれました。しかし、UNITA が選挙に敗れるとサビンビが選挙結果に不服を申し立て、再び内戦が勃発します。

1994年には政府と UNITA の間に新たな和平合意が結ばれ連立政府が樹立しましたが、依然不安定な政情が続きました。

1998年に内戦が再燃、1999年には国連アンゴラ監視団も撤退。

2002年にサビンビ議長が政府軍との戦いで死亡し UNITA が弱体化、アンゴラ内戦停戦合意への道が開けます。そして2002年4月4日、停戦合意の署名が行われました。

民地だったアンゴラでは、アンゴラ解放人民運動(MPLA)が権力を掌握、アンゴラ全面独立民族同盟(UNITA)との間に内戦が勃発しました。社会主義政権であるMPLAをキューバ・旧ソ連が、UNITA連合軍を南アフリカと米国が支援するという、当時の冷戦構造を多分に反映した対立でした。

1988年には東西両陣営がアンゴラから撤退しましたが、その時点で既に35万の人々が内戦で命を落としていました。

1991年になると、恩赦、国民統合軍の創設、そして複数政党制による大統領選挙及び議会選挙の実施を盛り込んだ和平協定がサビンビ UNITA 議長とドス・サントス大統領の間で結ばれました。しかし、UNITA が選挙に敗れるとサビンビが選挙結果に不服を申し立て、再び内戦が勃発します。

1994年には政府とUNITAの間に新たな和平合意が結ばれ連立政府が樹立しましたが、依然不安定な政情が続きました。

1998年に内戦が再燃、1999年には国連アンゴラ監視団も撤退。

2002年にサビンビ議長が政府軍との戦いで死亡しUNITAが弱体化、アンゴラ内戦停戦合意への道が開けます。そして2002年4月4日、停戦合意の署名が行われました。

2. 暴力と餓えにさらされた人々

この内戦の結果、アンゴラの国土は大きく荒廃しました。人口面や衛生面のデータ（粗死亡率・栄養不良率の高さ、マラリア・結核・はしかなどの再発率）を調べてみるとアンゴラが深刻な状態にあることがわかります。

アンゴラの人々にとって、攻撃、強制徴兵、ゲリラ戦、殺人、略奪はこれまで日常茶飯事でしたが、特に過去2年間、このような暴力がエスカレートしていました。ところが援助を最も必要としている人々のもとに必要な援助は届きませんでした。（一部の地帯は人道援助がまったく届かない「空白地帯」と呼ばれています）。

国内避難民や難民から国境なき医師団(MSF)が集めた証言によれば、多くの人が似たような状況に苦しめられていたことがわかります。恐怖政治、手足の切断や復讐行為(男性だけでなく妊婦・子ども・老人も含まれる)、家を失った人々は藪の中をさまよひ、強制移住させられた人々は戦闘に駆り出されたり人間の盾として前線に立たされました。

過酷な境遇の中、人々は怯え運命を諦めきっているように見えます。そして自分たちの土地に帰り、奪われた財産が戻ってくる日をじっと待ち続けています。しかし人々が待っている政府の帰還政策はいつになれば始まるのかわかりません。現在のところ国際機関からの支援はほとんど届いておらず、食糧の供給があるのは政府の代表が村を訪れる時だけですし、それでさえ量は少なく形ばかりのものに過ぎません。

政府の設置した避難民キャンプに暮らす人々は、わずかな食糧を求め、ますます遠くまで足を運んでおり、時には2日以上歩き続けることさえあります。「この場所にいたら安心して眠ることはできても餓えて死んでしまうだろう。」証言者の口からはこのような言葉が繰り返し語られます。援助が受けられるという政府の宣伝を信じてキャンプに移住してきた人々は、明日の命も保証されない状況に追いやられています。

MSFが避難民キャンプで行った聞き取り調査では、答えた人のほとんどが暴力の被害にあっています。またその半数以上は6ヶ月前にキャンプに到着してから少なくとも家族の1人を失っています。

3. MSF を通して見えるアンゴラ「空白地帯」の実態

今日の最優先課題は、迅速で大規模な食糧援助

1983年より19年間、MSFはアンゴラで活動を行ってきました。

アンゴラの保健医療施設の大部分は内戦で破壊され、住民の生命は長い間きわめて不安定な状態に置かれてきました。この国は、MSFの任地の中でも最も重要な国の一つです。



～栄養補給センターへ向かうバスに乗り込む人々～
(c)Sergio Cecchini

1998年11月には内戦が再燃、MSFの医療チームは戦闘地帯となった多くの場所から撤退せざるを得なくなりました。MSFは可能な地域でのプログラムを継続しつつ、2000年11月には報告書「アンゴラ：みせかけの『正常化』の陰で」を作成し、国際社会にアンゴラ一般住民の置かれた非人道的な状況を訴えました。

2002年4月の停戦により、国土の90%近くに相当する援助の「空白地帯」での活動が可能になりました。MSFはすぐに先遣隊を派遣し、現状調査を始めました。そしてそこで何万人もの人々が深刻な健康状態と飢餓状態に陥っているのを目の当たりにしたのです。

この現状に対応するためMSFは現在、190人以上の外国人派遣ボランティアと約2,000人の現地スタッフを派遣し、18州のうち11州で救援活動に力を注いでいます。今年4月以降現在までに、12の栄養補給センターと21の栄養補給・疾病治療センターを新設しました。

この大規模な惨事から人々を救い出すには、MSFの医療活動だけでは全く不十分です。しかし、アンゴラ政府から国際支援の要請はなかなか出されず、また国連援助機関の動きも遅く、状況は悪化しています。もし人道援助機関が迅速で大規模な援助を始めなければ、このあまりにも殺人的な事態によって今後更に何万人もの死者が出ることになるでしょう。

1998年以来「空白地帯」に囚われていたアンゴラの住民達は、まさに内戦の人質です。国際社会はこの緊急と呼べる事態を超えた異常な状況に立ち向かわなければなりません。何万人もの人々、とりわけ子どもたちが生命の危機に瀕し、また既に命を落としているのです。

死者と栄養失調者は過去半年間だけで既に数千人を数えています

MSF は、本年 4 月以降「空白地帯」での援助活動が可能になったため、文字通り死に直面している人々が集まっているいくつかの地区に先遣隊を送り、現状調査を行いました。

5 回の調査の結果、5 つの地区すべてで緊急事態が確認されました。

MSF では、プログラムを開始する前に必ず先遣隊を送り現地調査を行いますが、一国内で調査地の全てが一様に緊急事態に陥っているという例はきわめて稀です。

<各調査地で判明した統計的数字>

ブンジェイ： 人口約 14,000 人に対し、6 ヶ月以内に建てられた 1,050 の墓が数えられる。

シレンボ： 人口の 42%が栄養不良。そのうち 10%が重度の栄養失調。10,000 人に対し 1 日 4.5~5.5 人の割合の死亡率。

シピンド： 人口 18,000 人に対し 1 日 4.5 人の死亡率、57%の栄養不良率、6 ヶ月以内に立てられた新しい墓 4 千を確認。

シテンボ： 10,000 人に対し 1 日 5 人の死亡率。

ダンバ： 人口 2,000 人に対し 200 人以上の栄養不良者と、10,000 人に対し 1 日約 7 人の死亡率

今日、まだ 30 箇所以上の地区が同様の危機にさらされていると見られています。

(国内避難民を担当する国連人道問題調整部((UNOCHA))による)

多くの子どもたちが命を落としています

「空白地帯」での調査結果、死亡率や伝染病（麻疹、マラリア、結核、下痢など）の発生率そして栄養不良率は悲劇的な高さに至っています。これらの数字すべては、通常緊急事態とされる域をはるかに超えているのです。5 歳以下の子ども 1 万人に対し 1 日 6.1 人。この死亡率は、か弱く抵抗力のない幼い子ども達が最初の犠牲として大量に死んでいくという現実を表しています。しかし、飢餓で命を落としているのは幼い子どもだけではなく、6 歳以上の子ども



(c) Francesco Zizola
/magnum photos

も達、ティーンエイジャー、女性、高齢者もまた緊急の食糧援助を必要としています。

しかし食糧配給の不足によって、国内避難民たちの栄養状態はさらに悪化しています。MSF の医療チームは、子どもたちの栄養不良が中程度から重度へと変化していくのを日々目の当たりにしています。

MSF の外国人派遣ボランティアの証言



(c) Francesco Zizola/magnum photos

「ここは悲惨そのもの。想像を絶する苦しみがある。誘拐、奴隷状態、窃盗、暴力が繰り返され、何年にもわたる恐怖が存在する。ここ最近だけでなく、何年も前から、家族たちにとってはあまりにも多くの死がもたらされた。緊急に大人たちのために食糧を送らなくてはならない。畑にも森にも食糧は皆無で、次の収穫は 2003 年の 3 月か 4 月までないのだ。」

パスカル

「ブンジェイへ到着後、約 14,000 人の人口に対し 1,050 以上もの新しい墓を発見した。ここは、すべてを収奪された国内避難民たちが住む亡霊の街だ。」

ティエリー（緊急対策本部責任者）

「（幼い子どもではなく）成人が栄養不良に苦しむという事態、それは状況が非常に深刻だということの意味しています。そしてここには多くの飢餓状態の大人たちがいるのです。」

ブリジット（医師）

「最も重症の者たちを運ぶために悪路を 4 時間かけてカアラの栄養センターに向かうトラックが、そこに用意されています。今日運ばれる人たちは、昨晚テントで待機しました。ここでは夜間の通行は出来ないのです。男たちは骸骨のようにやせ衰えた子どもたちをトラックに引っ張りあげます。一人の母親は、子どもたちの横にぎこちなく座っています。彼女は空腹に苦しみ、こんなにやせ衰えるには大き過ぎ、またこんなうつろな眼差しを持つには若すぎるのです。あまりに多くのこれほどに痩せた体と、まぶたの裏がむくんで眼差しさえほとんど見えない状態を言い表すには、言葉は弱すぎます。」

アンナ

4. 避難民の証言



(c) Francesco Zizola
/ Magnum Photos

以下の証言は、2002年4月以降にMSF医療チームによる聞き取り調査で収集されたものです。これらの証言の多くに共通しているのは、穏やかに農耕をいとなむ暮らしが、ある日武装勢力の攻撃を受けて一変し、焼き討ち、略奪、誘拐、殺害、森林地帯での避難生活、飢えと病気、強制移住などの強烈な暴力にさらされた体験です。

「家は焼かれるし、畑から採れたものは全てUNITAに没収されました。今では2歳の子と2人きりです。夫は昨年9月、胸が苦しいと言って死にました。赤ん坊も7ヶ月前から下痢と熱が続いています。生き延びるため、近くの丘からキャッサバを盗みました」

マダガレナ (21歳)

「武器を持てと言われて断った女性がありました。背中に子どもをおぶっていたから。彼らは子どもを殺してしまってから『さあ、これで武器を持てるようになったろう』と言ったのです。」

カディナ

「ここじゃ、子どもはつらすぎて育たないわ」

ヴェロニカ (25歳)

「『ナカヘタ、ナカヘタ...』何と言っているのだろうと思ったら、お腹が減ったと言っているんです。でもね、空腹が辛いというよりは餓死寸前で『苦しい、苦しい』と言っている、というのが正しいですね」

マルタとインディリア

「政府軍の兵士が村にやってきました。そして村の人間たちに向かってを撃ち比べした。そんな風にしてみんな殺されたんですよ。」

ミゲル

「武器を持って軍についていかなきゃならなかった。軍では奴隷のように働かされました。食べ物といったら茹でた穀物です。動物の飼料ですよ」

ヘレナ (25 歳)

「まだ幼い頃に UNITA に誘拐されました。どんな風にだったかは覚えてない。6 つか 7 つの時だったのかな。お父さんやお母さんの顔も思い出せない。」

スザーナ (17 歳)

「10 歳の時に軍に誘拐されました。15 歳で結婚、4 人子どもを産みました。夫は 2 年監獄にいた。私が差し入れの食べ物を持っていくことができなかつたら夫は餓えて死んでいたところです。でもそのために私は兵士と寝なくてはならなかった。」

マリア (37 歳)

「人々は小さな傷が膿んだのが大きな浮腫になって死んでいった。たくさんの方が死にました。子どもから大人まで 1 日に 30 人、多いときは 50 人。私のいところは、ここから出て行こうとしただけで殺されてしまった。奥さんと 2 人の兄弟といっしょに。後には 2 人の孤児が残されました。」

ドミンガ (40 歳)

「今のところなんの援助もありません」

エロンディナ (41 歳)

「牢屋に入れられてあらゆる罰を受けました。穀物を探しに行く時は、私が逃げ出さないように子どもを人質に取られました」

デルフィナ (35 歳)

「私と子どもたちは、暴力を受けました。私は牢獄で 7 日間も何も食べなかったこともあります、そして 8 年も森にいたのです。」

デルフィナ (32 歳)

「私の夫は 2001 年 12 月 5 日に死にました。MPLA (アンゴラ解放人民戦線) に殺されたのです。自分の手で彼をお墓に埋めてあげました。住む場所もなく、雨の中で眠り、私たちはいつも空腹でした。」

マダレナ (26 歳)

「私の夫は足に銃弾を浴びました。何とか彼をベースキャンプに連れて行くことが出来ましたが、彼の出血はひどく・・・翌日亡くなりました。そこには、薬もなく医者もいなかったのです。」

エリンダ (54 歳)

「若者たち、少女少女たちは、青少年グループの中で幸福だということを証明するため、一日中歌い踊ることを強制させられました。それを拒否した若者は暴力を振るわれるか、牢獄に入れられました。」

マルガリダ (20 歳)

「私たちの部隊のリーダーは、私の 4 歳と 5 歳の子どもたちを私の目の前で殺しました・・・それは力を誇示するためで、子どもたちを殺すことでより大きな支配力を得ようとしたのです。」

マリア (30 歳)

「私の妻は 2001 年の 10 月に妊娠しました。ある朝武装集団がやって来た時、妻はうまく逃げる事が出来ませんでした。彼らは妻とおなかの赤ちゃんを殺しました。私はここに残りました。だって、彼女なしにもう希望などありません・・・それに、どこへ行けばいいのですか？」

ジョゼ (51 歳)

シピンド栄養補給センターにおけるインタビュー

Dさん (女性、35~40 歳)

～彼女は自分の年齢がはっきりと分かりません。今年の 4 月 29 日にシピンド栄養補給センターに着きました。～

「とてもおなかがすいていましたが、食べるものはさつまいもしかなくて、それを粉にしました。塩はないし、着るものもありませんでした。人々はお腹がパンパンに膨らんで死んでいきました。水腫もできていました。小さい傷ができると、これがどんどん大きくなりました。1 日 30 人、時には 50 人というように、多くの人々が死にました。子供も大人も。私は軍に連れられて、夫と 6 人の子供といっしょに 2002 年 1 月 1 日シピンドに着きました。子供のうちの 1 人は、水腫と飢餓と下痢で 3 月に亡くなりました。

シピンドに来る前は、シピンドから徒歩で 3 日のところにあるシコングエラに住んでいたんです。そこでは何もかもがうまく行っていました。食べるものはあるし、家畜もいて、牛も、耕す土地もありました。

UNITAの攻撃は1995年から始まりました。攻撃はだいたい1週間に1回、月に3、4回。UNITAは最初は、牛を盗み、次にとうもろこしを、次に衣類、次に調理器具をとっていきました。人をさらってはいきませんでした。これは我々がUNITAのコントロール下にあったからです。2001年以降、マタラやシピンドに行ってしまった者もいました。去年の12月、いとこの一人がシピンドに行こうとしたために、その妻と子供といっしょに殺されました。UNITAは2人の子供だけを生きかして、その両親と2人の兄を殺してしまったのです。彼らはシコングエラで更に別の人々を殺しました。私は、怖かったし、食べるものもなかったので、残りました。同じ月に政府軍がやってきて、我々を包囲しました。でも、誰も殺しませんでした。私は夫と4人の子供と一緒に、軍についてシピンドかマタラまで行かなければなりませんでした。そうすることに全く不満はありませんでした。私たちは何も持たずに出発し、シピンドまで3日間歩きました。途中、食べるものまでくれました。30人ばかりの団が私たちの家を焼き払ってしまいました。そして今年の1月1日にシピンドに着きました。

着いて3週間もすると、病気が広がりました。着いたころはいっぱい人がいたのに、1月の終わりには、みな病気のために死んでいきました。食べるものが何もなかったので、さつまいもを粉にしていたのですが、子供はこれで病気になって、お腹がパンパンに膨れました。老人も病気になりました。私たちはよく兵士に連れられて、もといた土地にさつまいもを探しに行きました。帰りにできるだけたくさんのさつまいもが持てるように子供は連れていけませんでした。

2月、子供が病気で亡くなりました。まだ3歳でした。」

Vさん(女性、35歳、シピンド出身)

彼女はインタビュアーの方を見ず、うつろな目をして話しつつけました。彼女はシピンドから徒歩で6時間ほどのところにあるシタタという村からやってきました。

「森ではうまくいっていましたが。穏やかな生活というわけではありませんでしたが食べるものはありました。けれどシピンドにきてからが問題です。シピンドでは安心して眠れますが、食べるものはありません。シタタでは畑を耕していましたし、牛も4頭いました。近所の人も何頭か飼っていました。」

彼女には子供が4人いて、夫はシピンドの行政機関で働いていました。シタタには絶えずUNITAの攻撃があり、兵士が残った住人を殺害していました。ある日彼女は村の外に避難し、翌日シタタに戻ってくると家族の何人かが殺されていきました。それは1996年のことです。父親は村の外にある畑に向かう途中で軍隊と出くわし、ピストルで撃ち殺されました。

「私たちは逃げることができました。UNITAはいつも、あるときは朝、あるときは夕方にやってきて、逃げられなかった人たちを殺しました。彼らは家畜を盗み、そして食料を、次に着るもの

を、そして調理器具を、というふうに、すべてを盗んでいきました。MPLA（アンゴラ解放人民運動）のメンバーだと言った男たちを殺しました。女たちも、JOTA（MPLAの青年組織）のメンバーだと言ったら殺されました。子供と老人は連れて行かれました。

2000年の6月、政府軍が村を攻撃して、牛を全部盗んで行きました。そしてUNITAは、私の夫が牛を返してもらうためにMPLAに情報を渡したと言って、夫を殺そうとしました。夫はそれを事前に知って、シピンドに逃れました。私は夫と一緒に逃げることは出来ませんでした。息子がそのとき病気だったからです。息子はもう歩けませんでしたから。

私は投獄され、以後常に監視されました。これは、夫が逃亡してしまった女たちすべてに言えることです。私達30人くらいの女たちは同じ境遇に置かれていました。何度も乱暴され、兵士たちと寝なければなりませんでした。そうしなければ殺されると感じました。捕虜だったので、いつも何でもしなければなりませんでした。兵士たちがしたいと言うことをすべてやらなければなりませんでした。とうもろこしを探しに行ったり、隊長のための仕事をすべてこなしたりしました。私達は焼いた葉っぱを食べていました。私がとうもろこしを探しに行くときは、私が逃げないよう、兵士は子供たちを人質に捕らえていました。でも、兵士は子供たちにひどい扱いをしたりはしませんでした。

それから2001年6月のある日、政府軍が再び攻撃を行い、UNITAは逃げようとしていました。混乱の中、私は3人の子供たちと一緒に逃げ出すことに成功しました。私には子供が4人いましたが、2人が死にました。1人はシタタの森で2001年の6月に死にました。15歳でしたが、病気になって死んでしまいました。もう1人はシピンドで2001年の8月に死にました。3歳でしたが、やはり病気になり、お腹がパンパンに膨れて死にました。2001年6月に最初の一人が死んだ後、シピンドに向かったのです。シピンドまで歩き、そこで夫と再会しました。

シピンドでの生活はとてもつらいものでした。3歳の娘は病気になり、2週間後に亡くなりました。そのころはとうもろこしがまだあったので、そう多くの人が死ぬというわけではありませんでした。それから9月以降とうもろこしはなくなり、さつまいもだけになってしまいました。」

2002年5月3日、カマクパー時滞在センターにおけるインタビュー

ルアンドから来た35歳男性

「私たちは3月にルアンドを出て、直接クエンバ第一キャンプへ来ました。そこで1ヶ月過ごしたのですが、食べ物がないとわかったのでカマクパに来たのです。ルアンドを出た理由は、食べ物が本当に何もなくて、着る物もなかったからです。それに戦争のために農作物を育てることができませんでした。カマクパならいくつかのキャンプがあって避難民に食糧を配給してくれると聞いたので、ここに来た訳です。」

南クワンザ州から来た 19 歳男性

「商売をしようと思ってモッシンデ村を出てアンデュロに来ました。食べるものも着る物も欲しかったし。何日かすると UNITA の兵士から軍に入らないかと誘われたので、入隊しました。2、3ヶ月そこで訓練を受けましたが、あまりに苦しかったのでやめることにしました。民間人として一緒に暮らせるような人を探しました。それであるおじいさんと暮らし始めたのですよ。ところが政府軍がアンデュロの街を攻撃にくるといふ噂を聞いたので、この人と一緒に 1999 年にアンデュロを出ました。アンデュロを出てクエンバの方に向かいました。襲撃を受けたのはいつだったかよく覚えていないけれど、ルアンドで政府軍の兵士に攻撃されました。すべて民間人でしたが大勢の人がいて、そこで僕も銃弾を受けたんです（足に銃創）。停戦合意があったと聞いて僕たちは森から出ました。戦争は終わってアンゴラに平和が来たのです。カマクパに来たのは政府からの援助があると思ったから。それ以前は森から出ることも許されなかったのです。もし街に行こうとしたら阻止されていたと思う。そうになったら逃げなきゃならないでしょう。逃げなければ殺される。いま僕は松葉杖がほしいです。モッシンデ村に戻って家族を探し、僕の面倒をみてもらいたいと思っています。」

リンゴマから来た女性

「私はずいぶん年をとっていますよ。何歳なんだか自分でもわかりません。父親が私の生年月日を教えてくれないまま亡くなったからね。生まれはリンゴマです。1980 年にウンブロに行って結婚しました。6 人の子供がいましたけれど、3 人は死んで 3 人は生きています。最初の襲撃を受けたとき私たちは森に逃げ込みました。それから家族が落ち合って一緒に暮らしていたんだけど、2 度目の襲撃を受けたとき、みんな離れ離れになってしまいました。夫は 1 人で、私も 1 人で、子供たちも子供だけになりました。私は森の中で迷ってしまいました。のちにクアンザヘ向かうグループについていくことができたんですよ。リンゴマからここまで 7 日くらいかかったでしょうか。7 日間、食べるものもなかったただ歩き、眠り、歩き、眠りの連続でね。まだ食糧はもらっていません。WFP カードの発行を待っているんです。私の望みは小さな家を建てて住むことです。どこに建てるかなんてまだわかりませんよ。指示があればそこに建てるだけです。」

カクンダから来た 70 歳男性

「マテウスといいます。カクンダでの生活がとても苦しくてカマクパに来たんですよ。今は食糧ももらっています。内戦が始まるまでは本当にいい生活だったね。作物を育てて、収穫した物を物々交換すれば着るものも石けんも手に入れた。たとえばトウモロコシやキャッサバやナッツを持っていけば、何でも欲しい物は買えたんだ。いい暮らしだったのは作物を育てていたからだよ。戦争中はそれができなかった。畑を耕そうとしても、何日か後には襲撃があつて森に逃げ込まざるを得ない。村に戻ってみたらすべて盗まれているってわけだ。ひどい生活だったね。」

内戦はやっと終わったが村は今でも飢饉に苦しんでいる。ここでは何でも政府に頼りっきりです。政府は「よし、みんな自分の村に戻っていいぞ」と言うだろうが、まずは食べ物をもらわないことには飢え死にしてしまいますよ。農業をするにも種がないんだ。1粒だってない。暮らしはすこしは良くなると思う。サビンビが死んで戦争が終わったから、これから良くなっていくだろうね。『種を配給する。村に帰って畑を作れ』と政府がいうのを待っているんだ。」

2002年5月11日、ブンジェイのMSFセンターにおけるインタビュー

ビクンゴから来た47歳男性

「ドミンゴスといいます。47歳です。福音主義教会の伝道師でした。妻と8人の子供がいましたが先月4人を亡くしました。息子はおとといビクンゴからここブンジェイに来る途中で亡くなりました。妻と2人の子供は病気のためMSFのトラックでカアラに向けて発ったところです。私はもう2人の子供と一緒にここにいるつもりです。

1月、両勢力から毎日のように攻撃され、私たちはチセングから森に逃げ込みました。兵士たちが我々の服もみな盗んでいってしまいました。私たちにはもう何もありません。

1月29日にブンジェイに来ましたが、そのとき滞在したのは2、3日だけです。いつも人が死んでいました。毎日40人か50人くらいでしょう。それに誰もが病気でしたね。私の子供たちも病気が重くなってきたので、2千人くらいの人たちと一緒にビクンゴに向かいました。軍が我々をそこに連れていったんです。

私は子供たちをクイトの病院に連れていきかけたのですが、ビクンゴを出ることはできませんでした。UNITAの兵士がそこらじゅうにいたからです。ある時逃げだそうとしたら、息子がUNITAの兵士たちに頭や胸をなたで殴られてしまいました。それから脱走を試みたりはしませんでした。

ビクンゴには今も病気の人が大勢いますよ。毎日9人か10人程度が飢え死にしています。食べるものといえば、キャッサバか、サツマイモの葉くらいですがそんなもので足りるはずもありません。

誰かが『ブンジェイに行きましょう。病院があるし、カアラでは子供の治療をしてくれるそうです』と言いました。しかし出発したのは歩く体力のある者だけでした。動けないほど弱っている者が大半でした。道にもう兵士の姿はありませんでした。以前みたいに襲撃されることはなくなりました。私たちのグループは子供を含め13人で、森で野宿しながら4日間歩きました。息子は木曜日に亡くなりました。

クバンゴ川には橋がないので途中でトラックを降りなければなりません。地元の人たちが掛けてくれた歩行者用の橋を渡りました。川幅はそんなに広くないけれど、流れの早い川なんです。ピクンゴからクバンゴ川まではたった2時間だけけど、そこからブンジェイまで長い時間歩かなければなりません。別のグループが私たちより前にブンジェイに到着していましたが、その人たちはもうカアラに送られたようです。残っているのは4千人ほどでしょうか、正確なところはわかりません。」

ガランジェから来た 30 歳女性

「セシリアといいます。クチェで生まれました。結婚していて夫はガランジェの軍のキャンプにいます。3人の子供と一緒にここに来ました。でも子供は飢えに苦しんでいるわけではないの。ただ病気なだけです。

お医者さんが薬をくれて、今はガランジェに行くまでに子供が良くなるのを待っているところです。ガランジェにはもう2人子供がいるわ。その2人は元気なんです。でもガランジェには薬がなかった。だからここに来たんす。ブンジェイに来れば助けてもらえるって聞いたものすから。

5月にガランジェに来る前は、チンゲンジョ(ガランジェから徒歩で2日)にあるUNITAの基地にいました。そこでは毎日戦争だったけど、食べ物はありました。

ガランジェには大勢の人が住んでいます。でもほとんどの人が病気なの。貧血とか下痢とか、熱をだしていたり疥癬にかかっていたりね。私たちが行ったときはもうすでにすごい数の人がいました。いろいろなところにあるUNITAの基地から集まってきた人たちです。ガランジェでは飢餓と病気で人が死んでいきました。食べ物を求めて農地に入ったら、農民に殴られるんですよ！以前はどこへでも行ってどれでも農作物をとっていたものすけどねえ。それができなくなったものすから、私たちおなかをすかせているんです。

ガランジェに着いたとき、政府が1キロのお米と、食用油を少しと、塩と石けんと魚を配給してくれました。それだけです。それが1家族10日分なんです。今はもう森には誰もいないと思います。みんなどこかに行きました。周りにいた人はみなガランジェに行きました。ガランジェでは、私たちは捕虜の扱いではないんです。男の人たちがここブンジェイまで子供を連れてくることもできます。その後彼らはガランジェに帰ります。

でもみんながみんなブンジェイに来たわけではないんです。ブンジェイに来て本当に助けてもらえるかどうかわからないから。でも体力のある人は来るでしょう。親が病気で子供を連れてくることができない人たちもいます。そういう人たちを迎えに行ってやって下さいよ。

チンゲンジョでは戦争でした。服も毛布もなくいつも逃げ回っていました。私にはもう何もありません。毎日がそんな感じでした。私は戦争中に大きくなりました。いつも軍の基地にいたけれど、政府につかまったことはありません。政府軍は私のものを全部盗んでいっただけです。両親は兵士ではなく農民でした。私は10歳の時にメノンジェでUNITAにつかまりました。妹と一緒にでしたが、妹はメノンジェに残りました。2年後に私は結婚しました。12歳でした。そして最初の子を産みました。いまその子は18歳です。5人の子供は生きています。亡くなったのは男の子1人だけ。この子は2歳の時に病気で亡くなったんですが、それも遠い昔のことですね。

チンゲンジョではみんなが農地をもっていました。だけど去年は戦争のために収穫はよくありませんでした。今私たちは援助を待っています。やり直すために作物の種が必要です。平和になりましたからもう戦争で死ぬ人はありません。でも飢えと病気で人が死んでいます。食べるものが足りないのです。」

5. ニュースリリース一覧

アンゴラ：死に瀕した国民

パリ 2002年4月24日

アンゴラのMSFチームによると、「空白地帯」に閉じ込められ飢えや病気で苦しむ数千人もの人々の存在がここ数週間で次々にあきらかになっています。「空白地帯」とは、数年前から人道援助団体が入ることの出来なかった地域です。その中には人々が数千人単位で移住させられている地区が30ほどありますが、戦闘のために彼らには援助の手が届きませんでした。村や家を焼き払われた住民は強制的あるいは脅迫されて移住させられ、両武装集団に交互に人質にされていました。埋設された地雷に加えて繰り返される攻撃や報復のために、これらの人々は耕作も収穫もできず生きる糧を失い、極度に困窮した状況に身を置いています。

現実はまだに悲劇的です。政府軍とUNITAとの停戦を受けてMSFはカアラ(ファンボ州)から116km離れたブンジェイ(ウイラ州)へ調査チームを派遣したところ、非常に高い死亡率が明らかになりました。アンゴラ緊急ミッション責任者のティエリ・アルフォール-デュヴェルジェ(Thierry Allafort-Duverger)は次のように語っています。「ブンジェイに到着してから、住民14,000人のこの町で1日14人もの人が死んでいきました。掘られたばかりの新しい墓が1,050以上もあります。ブンジェイは昨年9月から今年2月の間に避難民が着の身着のまま逃げてきた死の町なのです。」

栄養不良率は警戒値を大きく上回っており、診察した子どもの30%が重度の栄養失調でTFCに収容されました。

MSFはブンジェイに栄養不良児のための栄養補給センター(SFC)、及び病院を開設しました。チームは全住民に飲料水を供給し、10才以下の子ども3,500人には定期的に食料を配っています。またカアラのTFCでは現在、重度の栄養失調で苦しむ子ども900人が治療を受けています。

2度目の調査はシレンボ(ファンボから南に1時間半の町)で行われましたが、同様に深刻なものでした。1,219人の子ども達に対し上腕周囲測定帯を使った簡易栄養調査を行った結果、42%が栄養不良でそのうち10%が重症でした。現在TFCと6,000人にのぼる避難民のための食事配給所を開設中しています。

極めて憂慮すべき飢餓状態に陥っているこれら2つの町の人々には食糧配給が必要です。MSFは今後も他の地域での調査を続けていきます。もしこの深刻な事態がさらに広がっているならば、最大限の援助を迅速に行う必要があります。

この緊急事態に対しMSFは人員を3倍に増強し、救援物資を積んだ輸送機を次々に送っています。MSFは1983年からアンゴラで活動しており、今日現在、国内18州中11州で80名の外国人派遣

スタッフと 850 名の現地スタッフが、栄養プログラムをはじめとする医療活動に力を入れています。

新たなデータから、アンゴラにおける飢餓状況を確認

ブリュッセル/クイト 2002 年 4 月 26 日

MSF によれば、戦闘地域に暮らしていたアンゴラの人々の栄養状態は、過去 10 年間にアフリカで見られたなかでもっとも悪い部類に数えられます。1998 年の紛争再燃以来、これらの地域にはいかなる医療・食糧援助も入ることができず、先日の和平協定の調印以降ようやく援助団体の立ち入りが可能になったのです。

シテンボ(ピエ州の南部)からクイトに着く難民の栄養状態は、憂慮すべき状況です。もっとも最近のデータから、26%が急性栄養不良状態で、9%は重度の栄養失調に陥っているということが明らかになっていますが、この数字は緊急事態とされる水準をはるかに上回っています。これらの人々はクイト市内で MSF が運営する TFC に収容されています。同様に、ファンボ州南部における栄養不良も非常に深刻です。カアラから 116km 離れたブンジェイでは、重度の栄養失調率が 30%にのぼることが医療チームによって確認されています。またシレンボでは、10 才以下の子ども 1,219 人を対象として簡易栄養調査を行ったところ、42%が栄養不良状態にあり、10%は重度の栄養失調に陥っていることがわかりました。人口 10,000 人に対して日に 5~10 人という死亡者数は、警戒値(人口 10,000 人に対して日に 1~2 人)を大幅に上回っています。

「衝撃的な数字です。しかしながらこれらの数字があらわしているのは、紛争の再開以来この国の多くの地方に広がっている危機の、目に見えるごく一部にすぎないのです。和平協定それのみによって状況が改善されることはありません。たしかに和平協定が結ばれたことで、私たちの緊急医療チームは援助を必要としている人々のもとへ行けるようになりました。しかし、医薬品や食糧をただちに彼らのもとに届けるためには、国際的な行動が緊急にとられることが必要なのです。」と、MSF ベルギーのオペレーション・ディレクターであるコーエン・ヘンカー(Koen Henckaerts)は言います。

アンゴラにおけるこの食糧危機は、戦闘が行われていたあいだ人道援助団体がこれらの地域に入ることができず、多くの住民への人道援助が数年ものあいだ断たれていたことの結果です。また一方、この危機は紛争当事者双方の戦略の結果でもあります。戦闘集団の目的は市民を統制することにあつたため、彼らは住民を強制的に移住させ、村々を焼き払ったのです。

人々の生命を危機から救うためには、大規模な国際的援助が必要だと MSF は確信しています。3 人の国際派遣ボランティアからなるチームが、シテンボの難民に対して第 2 回目の調査を実施しています。また、援助や食糧を求めてさらに人々が押し寄せてくることを考慮して、MSF は SFC

の収容能力を強化しています。

ピエ州の南部は、1998年の紛争の再燃以来すべての人道援助を断たれてきた地域のひとつです。以来、国際人道援助団体がシテンボに入るのは今回が初めてです。またシテンボ市に近いウイラ州の北部でも、医療・食糧が不足しており、援助の莫大な需要があることが確認されています。

アンゴラの食料危機を警告

- 今ここで私たちが眼にしているのは氷山の一角に過ぎない

ルアンダ 2001年5月6日

MSFは、次第に明らかになるアンゴラの食料危機の深刻さに懸念を強めています。和平プロセスが始まって以来、MSFはそれまで立ち入ることができなかった地域での援助を除々に始めています。これらの地域には、十分な食糧もなく、生きていくために必要なものをすべて奪われ、いかなる援助も受けられないままに完全に孤立した中で何千人もの人々が生存していることが確認されました。ほとんどの人が栄養不良に陥っています。多くの人々がすでに命を落とし、そして緊急援助が迅速に行われなければさらに多くの人々が命を落とすことになるでしょう。

3日前、MSFのチームは中央北部のマランゲ地方に最近出来た2つのキャンプで緊急調査を行いました。UNITAの兵士とその家族が武装解除に応じるため、森林地帯からでて、このキャンプに集まって来ています。キャンプ内の死亡率は1万人に対し1日7人と推定されています。これは通常緊急事態とされる粋をはるかに超えた深刻な死亡率です。

MSFは重度の栄養失調に陥っている子どもをマランゲのTFCに搬送し始めています。「こんなに状況で多くの人々が苦しんでいる光景は悲劇的で絶えがたい。衰弱した人々は既に命を落としてしまったようだ、そして余力のあった人々も衰弱している。何人かの女性と話をしたところ、みんなが子どもの全員を失っている。これらの人々の苦しみを表現するだけの言葉が見つからない。」マランゲのプロジェクト・コーディネーターであるEls Adams(エルス・アダムス)は言う。

ここ2週間の間にMSFはマランゲに3つのTFCを新設しました。これでマランゲのTFCは合計5つになりました。現在大人と子ども合わせて360人が治療を受けています。

MSFのチームは他の地区でも栄養不良について同様の数字を確認しています。1週間以上前からシピンド、ブンジェイ、シレンボ、メノングエで計150人以上の重度栄養失調の子どもに治療を始めています。かなり衰弱していてもMSFのセンターまで歩いてやってきた子どももいれば、アンゴラ政府のトラックに乗って来た子どももいます。あまりに衰弱していて、食べることもできない子どもには経鼻栄養食注入管を用いて、注意深く栄養補給を行います。こうした子どもには24時間で8回にわけて栄養補給を行う必要があります。それによって体力は数日のうちにめざましく回復します。栄養不良の子どもは平均23日収容されます。そのうち5日間はTFCで集中

的に治療を受け、その後、SFCで2週間から4週間1日に2食栄養食を摂取します。

MSFは国連に対してこの緊急事態に対応するよう求めています。同様に、世界食料機構(WFP)に対しても何もかも奪われた人々の栄養状態がこれ以上悪化するのを避けるために、食料配給を迅速に行うよう重ねて要請しています。

アンゴラの食糧状況に強い懸念 (AFP 配信)

パリ 2002年5月10日

人道援助団体の国境なき医師団(MSF)は、アンゴラの複数の州にわたり広がっている食糧危機に対し、ますます懸念を強めています。

和平交渉の開始頃から、それまで立ち入ることの出来なかった人道援助の「空白地帯」は少しずつ開かれてきました。「空白地帯」のなかで数年に渡り完全に孤立した状態におかれていた何千人もの人々は、生き延びる手段もないまま、その多くは飢餓にあえいでいる、とMSFは指摘しています。また「多くの人々は既に命を落としており、迅速な緊急援助が行われなければ、更に多くの命が奪われる事態になるだろう」と強調しています。

アンゴラの複数の州で活動をしているMSFの医療スタッフによれば、数万人が、特に幼い子どもが生命の危機に瀕しています。

27年という長年に及ぶ内戦の影響と、医療・衛生インフラの大半が破壊されている現状からMSFはアンゴラでの活動にとりわけ力を入れていきます。MSFはまた、国連機関に対し、迅速な危機対応を求めています。

アンゴラ和平の行方 (AFP 配信)

ルアンダ 2002年5月8日

アンゴラ国内の旧武装集団が集められているキャンプで、生活条件の極度の悪さに懸念が強まっています。人道援助団体の国境なき医師団(MSF)によれば、これらのキャンプには全ての物資が不足しており、この状況が続けばようやく成立した和平合意が再び脅かされることも考えられます。

アンゴラ北部のマランゲで活動する唯一のNGOであるMSFは、反政府勢力(UNITA)の武装解除に応じた兵士とその家族のために設置された全国35のキャンプのうち2ヶ所を視察する機会を得ました。その現状は驚くべきものでした。「衰弱した人々ははすでに命を落としてしまったようだ、そして余力のあった人々も衰弱している。何人かの女性と話をしたが、みんなが子ども全員を失っている。これらの人々の苦しみを表現するだけの言葉が見つからない。」と、マランゲの

プロジェクトコーディネーターであるエルス・アダムス(Els Adams)医師は言っています。

ルアンダから発信された MSF のニュースリリースによれば、MSF はアンゴラ政府に対し、食糧配給や子どもへの予防接種の実施など、キャンプに暮らす UNITA の旧兵士とその家族が必要としている支援を緊急に提供するよう要請し、また森林地帯の中に設置されているキャンプまでの交通手段の確保も求めています。

政府によれば本年 4 月 5 日の和平合意以降、UNITA 兵士 5 万 5 千人のうち 3 万 5 千人は武装解除に応じるため、既にこれらのキャンプに集まってきています。彼らの家族親族も含めた約 35 万人がそこで援助を待っています。しかしアンゴラ政府軍はこれらキャンプを武装地帯と認識しており、いかなるジャーナリストも援助団体も入ることを拒んでいます。MSF もマランゲの現地当局に対する特別の依頼が受け入れられるまでキャンプを視察することは出来ませんでした。

キャンプの周辺で活動を展開している MSF には危機的な状況に関する情報が入ってきています。「人々は何一つない場所に集められています。彼らは身一つのみです。」Action Catholique Contre la Faim(ACCF:「飢餓とたたかうカトリックの行動」)のエリック・フォール(Eric Fort)氏は語っています。「政府軍は最小限の食糧配給を行うにとどまり、旧兵士達には雨風をしのぐ屋根も、毛布も、着替えも、薬もありません。人間が生存するための最低限の条件が満たされていません。キャンプの状況を早急に改善しなければ、今後の和平プロセスの進行に影響が及ぶことになるでしょう。」

武装解除に応じた兵士達に対し効果的で迅速な援助が提供されなければ、彼らはキャンプを離れて森林地帯に戻り家族と自らの生活のために再び犯罪行為に走る危険があります。少なくとも 50 万人が命を落とし国内経済を壊滅させた 27 年間の内戦の未ようやく断ち切れた暴力の連鎖に、再び陥る可能性もあるのです。

国連に、アンゴラ政府による旧武装勢力の武装解除が順調に進むよう、支援していく用意があるとしても、現在のところ政府からはいかなる正式な支援要請もありません。「それは国の威信に関わるのです。政府はこの分野での外国の『介入』を望んでいません。」とあるアンゴラ人ジャーナリストは匿名で語っています。